脱肉体化時代の官能的思索
― ヴィレム・フルッサー論考（3）[1] ―

越　智　和　弘

1．ヴァンピュロトイティス・インフェルナリスとはなにものか

性の充満した理性による思索

これまでヴィレム・フルッサーの著作『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス[2]』をめぐりすでに二編の論文を公表してきた[3]が、その際、そもそも *Vampyroteuthis infernalis* とはなにかについての議論はおこなわなかった。理由は、執筆者が現代を〈脱肉体化された時代〉とみなすにいたった一連の考察過程[4]のなかから、必然的にみいだされたフルッサーの世界に、いってみれば一刻も早く飛び込みたかったからである。しかし、同時代を読み解くうえでフルッサーの著作がいかに刺激に富んだものであろうと、*Vampyroteuthis infernalis* なる存在について、そしてフルッサーの人となりについて触れぬままこれ以上考察を進めるのは得策ではないであろう。

したがって本論においては、*Vampyroteuthis infernalis* とはなにものかについて、これまで自然科学と人文学の双方から明らかにされてきた内容を概観し、そこから浮き彫りになる西欧近代の特殊性を明らかにすることで、フルッサーを考察する意義をさらに明確化することを目指したい。その際まずは、考察全体を基調づけるテーゼを明示しておかねばならない。それは、*Vampyroteuthis infernalis* が「性を充填された理性によって思索する」[5]生命体だとするフルッサーのことばである。ただ現時点でそう聞かされても、*Vampyroteuthis infernalis* がそもそもいかなる生物か、またヴィレム・フルッサーとはどのような人物なのかについて、なんら情報が提供されていない段階では、どう受けとめてよいものやら見当もつかないであろう。それについては、これから順を追って説明していくこととし、ここではやや予備的な注釈をひとつ加えておきたい。周知のとおり、「性」はとりわけ近代以降の西欧においては、「理性」から一貫してもっとも遠い位置におかれてきた。その伝統のなかでみると、*Vampyroteuthis infernalis* が、「性」と「理性」をたんに結びつけるだけでなく、「性を充填された理性」によって「哲学する」存在だとするフルッサーの規定は、なによりもまず意表をつくものであり挑発的である。性の充填された理性によって思索する *Vampyroteuthis infernalis* とは、はたしてなにものか。われわれの生きる時代にいかなる意味をもつのか。それを考えることが、当面の課題となる。

Vampyroteuthis infernalis という耳慣れないことばが、ある生命体を指していることは、うえに紹介したフルッサーのことばからも想像されるだろう。そこで、まずはこの名称を冠したフルッサーの本が世にでる以前に、*Vampyroteuthis infernalis* について、どのような言及がなされてきたのか、それについて触れておかねばならない。*Vampyroteuthis infernalis* という学名をもつ深海生物については、ロジェ・カイヨワが 1973 年に発表した『蛸 *Der Krake*』[6] のなかに、つぎのような言及がある。

> Der Krake は、生物学的にみれば遙かかけ離れた、綿毛でおおわれた羽をもつ吸血コウモリ Vampire に結びつけられる。この吸血コウモリは、その悪魔のごとき翼で風をおくり、旅人をうとうとと眠りつづけさせる。要するに der Krake は、吸血コウモリと同じ科に、強引に取り込まれてしまったのである。翼種類をめぐる伝説が頭足類の伝説を養い豊かにしている。なんと科学的な分類法までがそうした伝説に感染してしまっているのだ。Kopffüßer（頭足網）のなかの Kalmare（十腕ヤリイカ目）と Kraken（八腕タコ目）のあいだに、*die Vampyromorphen*（コウモリダコ目）というのがはいりこんでいるが、これに属するものは *Vampyroteuthis infernalis*（地獄のコウモリダコ）のたった一種のみである。それは紫がかった赤色をした生きた化石で、1940 年から 1952 年にかけて、グレイス・エヴリン・ピックフォードがその研究をおこなった。想像のおよばぬ太古の生命の遺物であるシーラカンスと同じく、熱帯と亜熱帯の深海に住む。私がこのコウモリダコのことに触れたのは、それが、密かな好みや、一方的な思い込みを生みだそうとする執拗な傾向を不意に呼び覚ますからである。[7]

以上のカイヨワの文面からは、われわれの考察にとって重要な意味をもつ二つの要素が浮上する。それはひとつには、*Vampyroteuthis infernalis* はたんなる空想上の存在ではなく、海洋学者－カイヨワはピックフォードの名をあげている－によって発見、命名された実在する生物である点。同時に二つ目の点として注目されるのは、それが執拗な想像をかきたてずにはおかない存在だとされていることである。言い換えれば *Vampyroteuthis infernalis* は、いわば生物学的な発見と伝説や言い伝えをとおし形成される神話の中継点、すなわち自然科学のもたらす成果と、文学や芸術、哲学といった人文学的関心との双方を連結する位置にあるきわめて希有な存在として、まずは想定されるのである。

ここでカイヨワの本の構成と、そこから浮かび上がる西欧の特殊性を指摘しておくことも、のちにフルッサーの著作 *Vampyroteuthis infernalis* との関連をさぐるうえで有益だと思われる。この本は大きくわけて二部構成になっており、それぞれが、「幻の源泉（邦訳は「発生」）」、「神話の勝利」と題されている。そこから、カイヨワが主張する基本的

な方向性が読みとれる。それは、本書における彼の意図が、Kraken をめぐる自然科学と人文学の成果をたんに並列的に記述することではなく、「幻」や「神話」ということばが喚起するように、この生物をめぐり、人間、とりわけ西欧近代の人びとが、いわば「科学」に対抗する、いや、むしろ科学的事実を凌駕するかたちで膨大な表象を産出してきた過程を論じることにある。第一部においては、Kraken をめぐる過去の人類史上における表象の形成過程が、三つに分けて紹介されている。第二部においては、Kraken をめぐる表象が、科学的客観性を押しのけるかたち産出されていくという意外な過程が詳述されている。まず第一部であつかわれている Kraken をめぐる三つの大きな区分だが、その一つ目は、古代ギリシア－ローマ時代にみられた、食用の対象であると同時に装飾のモチーフとしての表象である。二つ目にカイヨワが紹介するのは、西欧以外の極東アジア、とりわけ日本におけるそれであり、そこでは Kraken が、一般にイタズラで好色な生き物として表象されてきたことが語られている。以上の二つの表象例に共通するのは、いずれの場合、つまり通時的対象としてのキリスト教化する以前の古代ヨーロッパにおいても、また共時的対象としてある西欧以外の諸地域においても、Kraken は人間からみた脅威としても嫌悪や恐怖の対象としても表象されてこなかったことである。

では西欧の場合はどうか。ここでカイヨワは、Kraken をめぐる「神話形成」が、科学的解明をはるかに凌駕するかたちで進行したという意外性に加え、その表象のされ方が、うえで比較された通時的な対象とも、共時的な対象とも決定的に異なっている事実を浮かび上がらせる。そこで明らかになるのは、とりわけ 16 世紀以降の西欧、とりわけアルプス北方のヨーロッパ地域における Kraken の表象のされ方、そしてそれをめぐる言説形成―カイヨワ風にいえば神話が形成される過程―が、他の地球上のいかなる文化圏ともかけ離れた性格をもっていた事実である。ただここで忘れてはならないのは、われわれの関心事が、あくまでも *Vampyroteuthis infernalis* とはなにかを解明することであって、Kraken の表象を追うのは、それによって *Vampyroteuthis infernalis* がもつ性格の理解につながると考えるからにすぎない。したがって *Vampyroteuthis infernalis* との関係性を見失わないためにも、先にカイヨワが *Vampyroteuthis infernalis* に言及していた箇所を、いまいちど確認しておく必要がある。

カイヨワは、*Vampyroteuthis infernalis* という学名が、そもそも海とは縁のない地上の生物であるクモやヒル、さらには吸血コウモリ Vampir との連想から生まれていることに着目する。そこからは、さきに彼が述べていたこと、つまり、科学的成果と神話形成との中継点として Kraken がもつ意味が確認されるのである。それをカイヨワは、「科学」が人間がもつ想像力によって「感染してしまっている」[8] と表現していた。そして、ここにカイヨワが先に示した西洋古代とアジア地域との比較を加味すると、*Vampyroteuthis infernalis* /Kraken が「自然科学」と「人間の想像力が生みだす表象」との連結点となり

えた、つまりそこから「神話」が発生しえたのは、古代ヨーロッパやアジア地域においてではなく、まぎれもなく16世紀以降の、自然科学が飛躍的な進歩をとげた西欧近代においてであったことが確認できる。カイヨワが関心をいだくのは、Krakenをめぐる科学的な調査が進むのとは対照的に、「脅威」や「恐怖」、「嫌悪」といった非合理的表象や言説の爆発的な増殖が、西欧近代のみにおいてみられたという特殊な現象である。では、なぜそのような現象が西欧において起きたのか。その理由をこれから考えていかねばならない。

Vampyroteuthis infernalis と *Kraken* の関係

まず必要となるのは、そもそも *Vampyroteuthis infernalis* と、カイヨワの本の題名である *Der Krake* との関係を確認しておくことであろう。この点に関しカイヨワは、前述の引用文のなかで、*Vampyroteuthis infernalis* は、頭足綱の下に分類される Kalmare（Teuthida）目と Kraken 目とのちょうど中間に位置し、頭足綱の3番目の目である die Vampyromorphen に属するものとしては唯一その存在が確認されている「種」だと述べていた。頭足綱 Kopffüßer（Cephalopoda）のなかで最大の目（Ordnung）をなす Kalmare に属する種（Arten）は現在250ほどの種が確認されており、さらに Kraken 目についても50を越える種がその下に分類されている事実を考慮すれば、die Vampyromorphen 目の下に *Vampyroteuthis infernalis* 一種しか存在しないという事実は、その際立った不均衡さからも注目に値する。ちなみにこの事実は、のちにフルッサーが話題にすることでもあるが、ヒト種の奇妙な唯一性とも共通性が認められる。つまり、われわれが属する Homo sapiens sapiens は、その一種を除けば、かつて同じ群に属していた Homo 種のすべてが現在では絶滅してしまっているという、生物学的には奇妙でありながら忘れられがちな事実が想起されるのである。

Vampyroteuthis infernalis についてカイヨワは、Kalmare と Kraken の中間に位置するものとして紹介していたが、Kraken 目についてみると、その上部目[9]と位置づけられる八腕目イカ Achtarmige Tintenfische の生物学的別名がすでに Vampyropoda とされていることから、Kraken 自体がすでに「吸血コウモリ」との連想のもとに分類されていることが分かる。じつは die Vampyromorphen を挟むかたちで位置する Kalmare と Kraken の二つの目については、その生物学的分類法とは別に、西欧においては、両者の表象のされ方に決定的な違いが認められることも、カイヨワの指摘からわかる。それはどのようなものなのか。

この点についてカイヨワは、本来きわめて攻撃的な性格をもつ Kalmare をめぐって、19世紀から20世紀にかけて、西欧の船乗りが数々の攻撃により損害を被った記録を残しているにもかかわらず、一般に人びとは、これらを Kalmare としてではなく、一貫し

て Kraken―*Octopus giganteus*[10] という学名まで与えられている―だと思い込んできたというのである。つまり、カイヨワがここで際立たせるのは、実際には Kalmare が、いくらその凶暴な性格を示そうが、西欧の人びとはそれをつねに Kraken だと思い込み、Kalmare については、一貫して危険な脅威ととらえようとしなかったという奇妙な事実である。

> Kalmare は、いくら並外れて大きかろうが、危険な存在であろうが、人びとの心を揺り動かすことはなく、魅惑も、大げさな恐怖も呼び覚まさない。それは、どちらかというと象あるいはクジラに近い印象を与える。それにたいし der Krake は、いや der Krake のみが、恐怖と嫌悪を呼び覚ますのである。これほどまでの反応の違いが何に起因するのか、その理由を究明することが必要であろう。[11]

こうしてみると、われわれの関心を引く *Vampyroteuthis infernalis* は、先にみた分類法において Kraken の上位目に Vampyropoda という学名がもちいられていたこととも関連し、その学名に「吸血コウモリ」や「地獄」といった海洋生物とは縁遠い、むしろ人間の想像から導きだされた名称がもちいられていることからして、Kalmare よりは Kraken に近い性格をもつ存在であることにまずは間違いないであろう。しかしそれにしても、Kalmare については、それが実際に西欧の人びとにどれほど被害をおよぼそうと、なんら「神話的反響」を呼ばなかったのにたいし、Kraken―そこには *Vampyroteuthis infernalis* も含まれる―だけが、西欧の近代人に恐怖から嫌悪にいたる表象の爆発的増殖を生みだしてきたことは何を意味するのだろうか。くどいようだが、先に示したカイヨワの引用文を、いまいちど確認しておこう。

> 私がこのコウモリダコのことに触れたのは、それが、密かな好みや、一方的な思い込みを生みだそうとする執拗な傾向を不意に呼び覚ますからである。[12]

この引用に先立つ箇所でカイヨワは、「Der Krake は、いわば巨大な海のクモなのである」[13] と述べ、さらにクモのイメージは西欧においては、人間の血を吸うヒルのイメージに結びつけられてきた歴史がある[14]、と論じている。ここでやはり確認しておかねばならないことは、この生物の名称が、クモやヒル、吸血コウモリといった、深海に住む生物とはそもそも縁のない生き物と結びつけられ、そうした想像の生みだすイメージにもとづいて「科学的な」名称が付与されている点である。そこには、先のカイヨワのことばにあるように「科学的な分類法までが感染」[15] するまでの、ある意図をもった言説化への執拗で強力な意志が、西欧近代においてはたらいていたことが想像できる。そもそ

もフルッサーの著書の題名である *Vampyroteuthis infernalis* とはなにものかへの答をみいだすべく出発した考察をすすめてきたいま、避けがたく立ち上がるのは、*Vampyroteuthis infernalis* の上位に分類される die Vampyromorphen を挟むかたちで併存する Kalmare 目と Kraken 目の表象のされ方に大きな違いがあることが明らかになったうえで、その理由を問うたカイヨワがその奥に想像していた内実をつかみだす必要性である。予測されるのは、Kalmare を除外し、その反面 Kraken からのみ脅威や恐怖、嫌悪の表象を産出させる西欧人に特有な心的構造の存在である。それはどこからきて、どのように機能しているのだろうか。その答をみいだすには、いましばらくカイヨワの書をたどる必要がある。

二段階からなる Kraken の言説形成

すでにみたように Kraken は、古代ローマ・ギリシアにおいてもアジアにおいても、基本的には人間にとって脅威とはみなされてこなかった。ところが、それが西欧において、とりわけ 16 世紀以降の近代という時代にはいると―ここでは、その対象となる時代と地域が宗教改革以降のアルプス北方のヨーロッパ地域であることには無視しがたい意味があると考えられるのだが―人間を驚愕させる巨大な海洋生物として爆発的な言説化の対象となる。カイヨワは、こうした言説化の起点をなす Kraken との遭遇を記した最初の例として、1555 年にローマで出版された『北方の諸民族の歴史』*Historia de gentibus septentrionalibus*[16] という書を紹介している。[17] この本の著者は、オラウス・マグヌスというスウェーデンの高位聖職者である。彼は、ローマ法王からスウェーデンの都市ウプサラの大司教に任命されたものの、同じ時期に、スウェーデン国王グスタフ・ヴェサが宗教改革を導入し、スウェーデン全土をプロテスタント化したため、任地に赴くことが叶わなかったという、皮肉な運命をたどった人物である。マグヌスの書のなかには、Kraken の具体的な名は登場しないものの、マグヌスは、この生物が「並外れた大きな目」をもち「頭が体に比べて不釣り合いに大きい」ことを強調していた。[18] 亡命中のマグヌスは、Kraken を実際に自分の目で確認したわけではなく、13 世紀にメッシーナ海峡で目撃された巨大な蛸の話に、聖書の「ヨブ記」にでてくる怪物ベエモットやレビャタンなどを結びつけて、この巨大な生物について記述したのであろうと、カイヨワは推測している。重要なのは、ここに記されたマグヌスによる記述が 16 世紀以降西欧の、いわば第 1 段階とも呼びうる Kraken の表象モデルを形成していることである。この段階において特徴的なのは、そこで描かれる Kraken がまずは実在とも想像ともつかない、あやふやな様相を呈していることである。

この書物のなかで著者は、途方もなく大きな海の生物が存在することを認めている。

> 船員たちはこれを島と間違えて、錨を下ろす。体を温め、食物を煮るために、そのうえで火をたきさえする。動物は、このとき、火が発する熱に反応し海にもぐる。錨が運良く引きちぎれなければ、船もろとも船員もすべて海底に引きずり込まれてしまう。この怪物は恐ろしい姿をしている。「頭はすっかりとげでおおわれ、まわりにはとがった長い角が生えており、それはひき抜いた木の根のようなかたちをしている」[19)]

カイヨワは、このマグヌスによる描写がその後モデル化し、17 世紀から 18 世紀にかけて、デンマーク、フィンランド、ノルウェーなど、主に北方ヨーロッパにおいて Kraken をめぐるいわば二番煎じ的な言説がつぎつぎと数々生みだされていった過程を描写している。[20)] ただこの時期の表象のされ方をみると、そこにはある種の特徴が認められる。それは、この生き物が人間にとって脅威となる理由が、Krake 自体に攻撃性がそなわっているからではなく、その並外れた大きさにのみ起因するとされていることである。これが西欧近代における、Kraken のいわば第 1 段階における特徴である。

> 深海には巨大な種が存在する。その危険性は、邪悪な性格によるというよりは、その巨大さに由来するものである。[21)]

ところが、ある時期を境にこうした表象のされ方に決定的な変化が起きる。その契機となったのは、1802 年にフランスの軟体動物学者ドニ＝モンフォールが発表した『軟体動物の博物誌－総論と各論』*Histoire naturelle, générale et particulière* であった。[22)] カイヨワは、モンフォールこそが Kraken を初めて「真に道徳的な意味においての怪物に仕立てあげた」[23)] のだという。

> 彼は Kraken を邪悪で凶暴なものとして描く。Kraken がノルウェー沖のクラーケン *kraken* と異なるとすれば、まさにこの点においてである。クラーケン *kraken* の場合は、害を及ぼすことが合っても、それは意に反してのことでしかない。ドニ＝モンフォールは何度ものくりかえしてこのことを強調する。クラーケン *kraken* が「われわれの地球で最も巨大な動物」、もしくは「われわれの惑星では自然界に存在する最大の動物」だとすれば、それとは対照的に後者すなわち Kraken がもつ攻撃的性質を、彼は好んで力説するのである。[24)]

ここで目を引くのは、モンフォールが、かのマグヌス以降、北欧諸地域でくりかえし目撃されてきたものとはまったく別種の新たな Kraken の存在を強調している点である。

カイヨワのドイツ語文をみると、モンフォール以前の、からだは巨大ではあるものの人に危害を加える意図をもたないKrakenは、凶暴な性格をもつKrakenと区別する意味で、「ノルウェーの」という形容詞を冠したうえさらに*kraken*と小文字、イタリック体で表記されている。邦訳文を参照すると、*kraken*については「クラケン」、Krakenは「たこ」もしくは「蛸」と表記が混在し、不統一になるなど、翻訳者の苦労のあとがうかがえる。[25)]

こうしてみると、16世紀以降の西欧におけるKrakenをめぐる言説形成は、二つの段階に分けて整理できるものと考えられる。最初の段階は、1555年に発表されたマグヌスの『北方の諸民族の歴史』を発端に、17世紀から18世紀にかけて主に北欧諸地域で言説化された「巨大ではあるが攻撃性をもたない」イメージである。二つ目の段階は、19世紀初頭にドニ＝モンフォールの『軟体動物の博物誌－総論と各論』（1802）を契機に発展する、邪悪で凶暴な性格をもつKrakenの表象である。カイヨワは、モンフォールによるKrakenをめぐる表象が、「近代的な伝説の起点」[26)]をなしたと言い切る。では、軟体動物学者Malakologeを名乗るモンフォールは事実に基づく客観的な記録を残したのだろうか。この点になると、彼の言説はきわめて怪しい色彩を帯びてくる。たしかに彼は、アフリカ南西部のアンゴラ沖で実際に起きたとされる船を襲うKrakenのスケッチ画を残しているが、じつはそれはフランス北部の漁港街サン＝マロの教会に奉納された絵をもとに描かれたものである。モンフォールは数々のKraken目撃例を記録しているが、カイヨワは、それらについては「すべてつくり話だ」[27)]と厳しく切り捨てている。しかし同時にカイヨワは、モンフォールによって初めて表象された、Krakenのこのうえなく邪悪で凶暴な怪物的なイメージこそがモデル化し、その後西欧人の心に定着していったのだという。

> モンフォールの空想は、Krakenがきわだって凶暴な体質をもつことを後世に根強く印象づける点では、より恒久的な成功をおさめた。彼にとってのKrakenは、骨の髄から邪悪であり、根っから染みついた性格から、抑えがたい破壊への衝動と殺戮への欲求に取り憑かれた存在なのである。Krakenは「破壊のために破壊する」と彼は保証する。もちろんそこには何ら根拠はない。しかし、だからこそそれは自明の理だと強調するのである。彼はKrakenを「常習的暗殺者」として描きだす。それは「誰に危害を加えるわけでもなく普通に行動するものを不断に待ち伏せし、血まみれの殺戮行為をおこなったあとも、隠れることも逃げ場に潜り込むこともしない」[28)]

文学にたいする科学の敗北

こうして、16 世紀半ば以来継承されてきた、巨大ではありながら性格自体は温厚で、故意に人間を襲うことはないとされてきた Kraken の表象モデルに、19 世紀初頭のモンフォールを境に大きな変化が起きることとなる。モンフォールは、Kraken を無害などころか「骨の髄から邪悪であり、根っから染みついた性格から、抑えがたい破壊への衝動と殺戮への欲求に取り憑かれている」「〈常習的暗殺者〉」[29] だと決めつけることで、恐ろしい悪魔的存在へと変貌させたのである。以降 Kraken の表象をめぐっては、カイヨワの説明を読むかぎり、いくら新たな科学的事実が立証されようと、科学者をも含む西欧の人びとは、意外なまでにそうした客観的事実には関心を示さず、モンフォールが提唱した残虐で悪意に満ちた怪物としてのモデルから逃れられないどころか、みずからそうしたイメージにしがみつくのである。そこでは、モンフォールの証言がいくら「すべてつくり話」[30] だと科学が申し立てようが、効果がなかったことが分かる。

ここに一つの注目すべき現象が浮上する。つまり、われわれが目撃しているのは―おそらくカイヨワも Kraken という生き物が西欧的近代人の心に呼び覚ますこの不可思議な力学に惹かれたことが、この本を書く動機をなしたのだと推測されるが―人間の想像がつくりだす執拗で非合理的な意志であり、それが科学的客観性を凌駕するまでの力をもつことで神話[31]が形成されるプロセスである。繰り返しになるがあらためて思い出していただきたい。カイヨワはこの本の末尾で、*Vampyroteuthis infernalis* に言及した理由について、それが「密かな好みや、一方的な思い込みを生みだそうとする執拗な傾向を不意に呼び覚ますから」[32] だと明記していた。そしてモンフォールを起点に生みだされた Kraken の邪悪な怪物としてのデモーニッシュな表象は、いってみればかの 16 世紀以降一貫して発展を遂げてきた理性に基づく合理主義、科学やテクノロジー、そしてそれがもたらす進歩への信仰といった近代的理念が、西欧の人びとにますます浸透する 19 世紀、いや 20 世紀にいたっても、まったく衰える様相はみせなかったどころか、その後も雑誌や、映画、テレビなどのメディアをとおし増殖し再生産されつづけることで、大衆の心に作用し、その悪魔的幻影、すなわち神話の形成に寄与していったのである。[33]

近代という科学合理主義が基調づける数値的実証主義を信仰する〈脱神秘化〉の時代においてもなお、こと Kraken のイメージとなると、*Vampyroteuthis infernalis* という学名が端的に象徴しているように、「科学的な分類法までがそれに感染」[34] させられるまでの、非合理的な連想にもとづく執拗で強力な神話形成化への意志がはたらいたことは、注目に値する。それにしても、しばしば科学至上主義と実証主義がひとつの頂点を迎えた時代と位置づけられる 19 世紀において、「科学」の側からは、Kraken をめぐりいかなる成果が残されてきたのであろうか。気になるところである。これについてカイヨワは、先にみた *kraken* から Kraken への転換を論じたあと、「科学のためらい」[35] と題した章

をもうけ論じている。章のタイトルが暗示するように、ここで起きたことは奇妙としかいいようがない。まずカイヨワは、19世紀前半期には、聖書以降長きにわたり西欧人をとりこにしてきたKrakenをめぐる迷信や伝説めいた神話に終止符を打つべく、数々の研究者が客観的な調査に基づく記述の努力を進め、それによってこの生物についてより信憑性の高い科学的真実が明らかにされる兆しがみられたことを、具体例を挙げて明らかにしている。しかしそうした科学的な努力が積み重ねられたにもかかわらず、結果として残されたのは、さまざまな客観的発見を有効に活用することに科学者自身が尻込みしたあげく、相変わらず人間の想像力や思い込みがつくりあげる悪魔的神話の世界に呑み込まれてしまった事実である。

科学的真理への探究が、「文学」に敗北した決定的な転換点を、カイヨワは1861年にみいだしている。この年は、それまで記録されてきた少数の人びとによる証言とは異なり、軍の通報艦アレクトン号の乗組員全員が長時間にわたり、Krakenを目撃しそれと格闘した報告記が海軍大臣を経由して、科学アカデミーで論じられたことで記憶に残っている。アレクトン号の艦長から海軍大臣宛に送られたKrakenとの格闘の顛末を詳細に綴った報告書は、科学アカデミーの席で読み上げられ、そこでは、他のさまざまなKrakenの目撃談をもまじえ議論が交わされた。ただその結果、科学アカデミーが下した最終結論は、「『これまで知られているあらゆる無脊椎動物の大きさをはるかに超える』巨大な頭足類が何種類か存在する可能性を認める」という曖昧なものであった。[36] この結論は、一方では迷信、もしくは確かめられていない空想物語的な話が、科学的な認識へと移行しうる過程を記録すると同時に、まったくの絵空事であることが暴露された現象が、いくら伝説的な地位を誇っていようと、事実によって凌駕される徴候がみられたことにおいて特筆すべきだと、カイヨワは認めている。しかしそうはいえ、この出来事によってKrakenをめぐる科学的解明がその後飛躍的に進展したとはいえないことも事実である。それを暗示するかのようにカイヨワは、この章をつぎの言葉で締めくくっている。

> 最後に明らかになったことは、科学アカデミーという場においてでも、KrakenとKalmareの区別さえなされなかったことである。しかもその場にいた博物学者たちからは、なんの異論も提出されなかったのである。[37]

ロマン主義文学による神話の生成

同じ1861年はまた、19世紀フランスを代表する歴史家であると同時に、多くの博物誌的著作によっても知られるジュール・ミシュレが、Krakenについて記述した『海』を出版した年でもあった。『海』は、歴史書と並んでミシュレが精力を注いだ『鳥』（1856）『虫』（1857）『山』（1868）など一連の博物学的著作のなかに位置づけられるものだが、

そこに登場する「女性的他者」を連想させる Kraken の描写のされ方をみると、この著作が、前年 1860 年に発表された『女』と、1862 年の『魔女』に挟まれるかたちで発表されていることは気になるところである。

それはともかく、伝説から真理を導きだすことに失敗した「科学」とは対照的に、「文学」は、はるかに効果的に Kraken の悪魔的イメージを大衆に浸透させることに貢献したといわざるをえない。アレクトン号の報告に基づく議論が科学アカデミーで闘わされたのと同じ年に発表された『海』のなかでミシュレが、Kraken を「海の宇宙に破壊と恐怖の世界をつくりだす」「怪物のごときクモ」として描きだしていることを、カイヨワは報告している。[38] ミシュレの『海』をみると、それは、「海賊（タコなど）」と題された第 9 章につぎのように登場する。

> すでに太古の時代において、二種類の殺戮を旨とする動物がいた。それらは、喰らう種と吸血種である。前者は、今日では死に絶えてしまった。［中略］後者は、ぞっとするような遺物となっていまだその存在が確認できる。それは幅が二フィートにもおよぶ、イカかタコのものだったと思われる巨大な吸口である。これほど巨大な吸口から推察すれば、その体が口の大きさに釣り合いのとれたものだったとすれば、巨大な姿をしており（怪物のごときクモよろしく）長さが二〇から三〇フィートにもおよぶ吸盤を備えた恐ろしい触腕をもっていたことだろう。［中略］
>
> やわらかいゼラチン状の世界に生きる吸血種は、それ自体がやわらかくゼラチン状である。軟体動物と戦闘を繰り広げながら、それ自身もまた軟体動物である。つまりそれは、あいかわらず胎児の状態にある。それがもしもおどろおどろしい姿をしていなければ、まるでこれから戦地におもむこうとする残虐で憤怒に駆られた胎児のごとく、奇態で、滑稽で、グロテスクな様相を呈していたであろう。それは、やわらかく透明でありながら、同時に張り詰めた殺人者のごとき鼻息をもらす胎児なのである。というのも、それは、ただ空腹を満たすためだけに戦うのではない。殺戮を必要としているのである。たとえこれ以上食べきれないまで満腹しきっていても、それはなお殺戮をしつづける。[39]

ミシュレによるこの Kraken の描写からは、19 世紀初頭にモンフォールが提示したデモーニッシュな表象モデルが明らかに継承されていることが読みとれる。ミシュレ自身も、上記引用箇所のすこしあとで、Kraken をめぐる「数ある信頼のおける目撃証言からして、ドニ・ド・モンフォールによる描写を、あながち笑い飛ばすべきではなかったかもしれない」[40] と、モンフォールを支持する立場を示している。しかし同時に、ミシュレの証言からは、モンフォールの表象モデルにはない、新たな神話化に貢献する重要な

性格が加えられていることも認められる。それは、Krakenを、クモ（巨大な姿をし、お化けグモよろしく）や吸血コウモリ（吸血用の腕をもっていた／吸血鬼もまたやわらかくゼラチン状である）といった、海とは縁のない地上の動物と初めて結びつけている点である。

ミシュレにおいて初めて登場する、Krakenをクモや吸血コウモリと結びつける表象形式は、その後モデルと化してフランス・ロマン派の悪魔的形象となって受け継がれていく[41] カイヨワは、ミシュレが描きだすKrakenを、一方では「博物学者の軽信」「道を間違えた歴史家の詩的叙述」[42] と酷評しつつも、同時に、ミシュレが生みだした表象こそが、ロマン主義文学に多大な影響を与えたことを認めている。つまりミシュレの「軽信」や「詩的叙述」によってうち立てられた、残虐非道で、クモや吸血鬼を連想させるKrakenの表象モデルは、いってみれば「詩人のほとんど神学的な瞑想の前触れ」[43] でしかなかったのである。

> このようにして、幾人かの原典探究家とミシュレ、ユゴー、ジュール・ヴェルヌによる三冊の本の成功により、新たな空想物語が生まれ広まっていった。それは、とてつもなく大きく、相手を包み込む、ネバネバとした海のクモである。それは、海にもぐる人間を待ち伏せし、その血と肉をもろとも吸いとってしまうder Krakeというロマン主義文学の典型的な創造物である。神話 *Mythos* の発生過程を、このようにたどることができるのは、稀なことである。[44]

カイヨワが、Krakenの神話形成に貢献した文学作品としてあげるのは、ヴィクトル・ユゴーの『海で働く人々』（1866）と、ロートレアモンの『マルドロールの歌』（1869）、ジュール・ヴェルヌの『海底二万海里』（1869）である。ユゴーとヴェルヌの場合においては、モンフォールが19世紀初頭に提示した残虐で攻撃的なモデルと、ミシュレがそれに加えた粘着質で吸血性のクモのモデルをいわば合体し強化したかたちで継承されている。そうしたなか、ロートレアモンだけはある種異質である。つまりロートレアモンのKrakeにおいては、以上の三者にはみられない、新たな表象が顕在化しているのである。それは、Krakenが女性の性器と結びつけていることにみられる。その意味でロートレアモンのKrakenは、のちにカイヨワが「最も新しい変身」[46] と題した章で加えることになる、精神分析によるKrakenを「女性的他者」に重ね合わせる神話化の最初の前触れであったともみなせる。その箇所を引用しておこう。

> ときおり嵐の夜、とおくからだとカラスのようにみえる、翼をもつ蛸の一群が、行いをあらためよという警告をつげる使命をおびて、人間どもの街々にむかい、一直

線に力強く、雲のうえを飛行していると、陰気な眼をした小石は、二つの生き物があとになりさきになり、稲妻のきらめきのなかをよぎるのを見て、自分のこおりついた瞼から流れてくる、ひそかなあわれみの涙をぬぐい、そして叫ぶ。「たしかに、もっともなことだ。これこそ正義そのものだ」そう言ってしまうと小石は、また人見知りする態度にもどり、神経質にふるえながら、その人間狩りをみまもりつづける。そして小石は、そこからたえず大河のように、まっくろな無数の精子が流れでる、暗鬱なワギナの大陰唇が、そのコウモリの翼の茫漠としたひろがりで、自然のすべてを隠しているのをみまもりつづける。[46)]

以上から分かるように、ロートレアモンが描きだす女性的 Kraken は、それまでの無差別に邪悪な Kraken とは異なり、本性的な残虐性から意味もなく人間を攻撃する悪魔の形象ではない。それは、近代的人間（男性）の欺瞞、さらにはその創造者である神（男性的唯一神）の偽善的良心を罰するために、悪魔＝女性の性器と化して襲いかかるのである。ここでは、そもそもロートレアモンが、ウルグアイ国籍のフランス系二世であること、つまり彼が内面化していた当時のフランス社会にたいする異邦人＝女性的他者としての疎外された意識が Kraken に託されて作品のなかで噴出したことを想像するのは難くない。カイヨワが、ロートレアモンを他の先にあげた作家たちと同列に並べて論じることにやや戸惑いを感じているように見受けられる[47)]のもこの新たな異質性に起因するものなのかもしれない。しかしそうした観点からみれば、われわれが主眼にすえるヴィレム・フルッサーも、時代は異なるものの、ヨーロッパから南米サン・パウロに亡命し、のちにフランスを経由してヨーロッパに帰還したエトランジェである。そしてその時期に関心の中心を占めていたのが、まさに *Vampyroteuthis infernalis* によって体現される「悪魔性」であった可能性が高いことを加味すると、西欧の伝統のなかでは理性から最もかけ離れたものとして表象されてきた女性的なるものと邪悪の本質との関係は、やがて無視しがたい意味をもつことになる。

註

1）　論文題目に振られている（３）という番号については、注３）の後半に記された内容を参照。

2）　本考察においては、他の生物学的名称との混乱を避けるため、以降は *Vampyroteuthis infernalis* という表記を一貫してもちいる。

3）　本論文は、科学研究費　基盤研究（C）課題番号：26370163 の助成を受けた研究成果の一環として公表されるものである。これに先立ち同執筆者者が発表した二編の論文『脱肉体化時代の官能的思索－ヴィレム・フルッサー論考（１）－』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科　言

語文化論集　第XXXVI巻　第1号（2014）15 − 30頁）、Vampyroteuthis in der desexualisierten Welt − Studie zu Vilém Flusser（1）−（*Studies in Language and Culture Vol.36 Nr.2,* Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University 2015, S.23-45）もまた、同上の科学研究費による研究の成果である。なお、本考察に（3）という番号が振られているのは、上記の先立つ二編の論文のなかで、ドイツ語でしたためた二つ目の論文には（1）という番号が振られてはいるものの、その内容は日本語でしたためた（1）を大きく発展させたものであり、本論文がそれを引き継ぐものであることに起因している。

4）　この考察過程については、「労働力均質化時代の性と文化」の題目のもと、『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）第33巻第1巻〜第35巻第2巻に発表された6編の論文において詳細に論じた。

5）　本考察のライトモチーフをなすこの表現については、現存するVilém Flusser, *Vampyroteuthis infernalis* の三つのバージョンに、それぞれつぎのように表記されている。
"Da die begreifenden Tentakel mit Geschlechtsorganen versehen sind, sind die Begriffe, die Vampyroteuthis aus den Lichtkegeln der rationalen Vernunft (wir würden sagen: «reine Vernunft«) herausholt, geschlechtlich geladen: männliche und weibliche Begriffe" in: Vilém Flusser/Louis Bec, *Vampyroteuthis Infernalis – Eine Abhandlung samt Befund des Institut Scientifique de Recherche Paranaturaliste,* Göttingen 2002, S.46. (1), "Since its tentacles are equipped with sexual organs, the concepts that it abstracts from these illuminated cones of reason − "pure reason," as we would say − are sexually laden: There are male and female concepts." in: Vilém Flusser/Louis Bec, *Vampyroteuthis Infernalis: A Treatise with a Report by the Institut Scientifique de Recherche Paranaturaliste,* Minneapolis 2012. S.47 (2) "It is reason, therefore, that makes the world appear to him. Because reason is sexual: tentacles are the carriers of penis and clitoris. Every concept is either masculine or feminine.", in: Vilém Flusser, *Vilém Flusser's Brazilian Vampyroteuthis Infernalis,* Revised Edition, New York/Dresden 2011. S.83 (3)

6）　この書には、つぎの邦訳がある。ロジェ・カイヨワ著、塚崎幹夫訳、『蛸（たこ）—想像の世界を支配する論理を探る』、山陽社、1975年。ただ、本考察のテーマをなすder Krakeを、邦訳にあるように「蛸」もしくは「タコ」と訳すと、実体とは違う表象の連想を生む可能性が高い。したがって本論文においては、der KrakeもしくはKrakenとそのまま表記することとする。さらに本書からの引用文に関しては、上記邦訳は参照しつつも、ドイツ語版Roger Caillois, *Der Krake – Versuch über die Logik des Imaginativen,* München 1986から、執筆者が日本語に訳した文章を基本的にもちいることをここに明記しておく。

7）　Roger Caillois, *Der Krake – Versuch über die Logik des Imaginativen,* München 1986, pp.137-138.

8）　Caillois, a.a.O., S.137f.

9）　「上部目」Überordnung

10）　Caillois, a.a.O., S.102f.

11）　Caillois, a.a.O., S.103.

12）　Caillois, a.a.O., S.137f. 同じ箇所には、「Krakeは、いわば巨大なクモのごとき生物なのである」という表現もみられる。

13）　Caillois, a.a.O., S.136ff.

14）　ただ引用箇所だけからみると、カイヨワは、*Vampyroteuthis infernalis* という名前が、人間の想像

力をその奥深い部分でかきたてずにはおかない力をもっていること以上には、この生物にはさした関心を抱いていなかったかのような印象を受ける。これはあくまでも想像ではあるが、カイヨワはこの書をしたためた時点において、*Vampyroteuthis infernalis* そのものについては、さほどの知識を得ていなかったのかもしれない。これは、この生物に言及しなおかつその名前が、人間の想像力をかきたてずにはおかない性格をもっていると述べておきながら、それ以上は踏み込まないまま、この本自体がエピローグを迎えていることにも表れている。Caillois, a.a.O., S.137.

15) ”Sogar die wissenschaftliche Nomenklatur ist davon angesteckt worden.” Caillois, a.a.O., S.137.

16) gentibus=Völker: 諸民族。septentrionalibus=Siebengestirn=Plejaden: プレアデス星団＝昴（すばる）はラテン語で「七つの星」を意味するが、複数形で用いられると「北方」の意味をもつ。

17) Caillois, a.a.O. S.27.

18) Ibid.

19) Caillois, a.a.O., S.27.

20) Caillois, a.a.O., S.27f.

21) Caillois, a.a.O., S.31.

22) Ibid.

23) Ibid.

24) Caillois, a.a.O., S.31.

25) 参考までに邦訳の該当箇所を示しておく。カイヨワ、前掲書、35 頁以降。

26) Caillois, a.a.O., S.35.

27) Caillois, a.a.O., S.33.

28) Ibid.

29) Ibid.

30) Ibid.

31) カイヨワにとって重要な意味をもつ *Mythologie* を「神話」と訳すことに、若干の躊躇を感じざるをえない。なぜならここで意味されていることは、必ずしも「神」と結びつくことではなく、むしろ「非合理的神秘性」と親近性をもつ「伝説形成」に近いものだと思われるからである。

32) Caillois, a.a.O., S.138.

33) Caillois, a.a.O., S.93.

34) Caillois, a.a.O., S.137.

35) Caillois, a.a.O., S.35ff.

36) Caillois, a.a.O., S.44f.

37) Caillois, a.a.O., S.45.

38) Caillois, a.a.O., S.46.

39) Jules Michelet, *Das Meer,* Frankfurt/New York 2006, S.146ff.

40) Michelet, a.a.O., S.148f.

41) カイヨワは、Kraken を「海のクモ」とみなす神話は、「ロマン主義文学の代表的な発明物」だといえるとしている。Caillois, a.a.O., S.64.

42) Caillois, a.a.O., S.48.

43) Ibid.

44）Caillois, a.a.O., S.64.

45）Caillois, a.a.O., S.93ff.

46）Lautréamont, *Die Gesänge des Maldoror*, Reinbek bei Hamburg 2014, S.103f. ロートレアモン伯爵『マルドロールの歌』（前川嘉男訳、集英社文庫、2011年）119-120頁参照。

47）カイヨワは､「海のクモ」という新たな神話を生みだすうえで功績のあったロマン主義作家として、ミシュレ、ユゴー、ジュール・ヴェルヌのあげているものの、ロートレアモンの名は省いている。Caillois, a.a.O., S.64.